

# SRMの範囲の見直しに係る評価について

## 第121回プリオン専門調査会

# 最近の審議経緯

2020年9月11日 第119回プリオン専門調査会において、国内牛肉のSRMの範囲に係る審議を再開することを決定。

\* 評価書案起草委員：岩丸専門委員、高尾専門委員、筒井専門委員、八谷専門委員、福田専門委員、眞鍋専門委員

11月12日 第120回プリオン専門調査会において、SRMの範囲の見直しに係る評価の考え方及び目次案について審議。

12月18日 令和2年度第2回国際獣疫事務局(OIE)連絡協議会

2021年3月15日 第121回プリオン専門調査会

## OIEコード（SRMの範囲）

現行	無視できるリスク国	なし	
	管理されたリスク国	全月齢の扁桃及び回腸遠位部	30か月齢超の頭蓋、脳、眼、脊柱及び脊髄
	不明なリスク国		12か月齢超の頭蓋、脳、眼、脊柱及び脊髄
一次案 (2019年9月 OIEコード委 員会)	無視できるリスク国	なし	
	管理されたリスク国	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全月齢の回腸遠位部</li> <li>・30か月齢超の頭蓋、脳、眼、脊柱及び脊髄</li> </ul>	
	不明なリスク国	※ただし、管理されたリスク国については、BSE病原体が牛群内で再循環しているリスクが無視できると立証できる期間に当該国で生まれた牛は対象外	
二次案 (2020年9月 OIEコード委 員会)	無視できるリスク国	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全月齢の回腸遠位部</li> <li>・30か月齢超の頭蓋、脳、眼、脊柱及び脊髄</li> </ul>	
	管理されたリスク国	<u>※ただし、BSE病原体が牛群内で再循環しているリスクが無視できると立証できる期間に当該国で生まれた牛は対象外</u>	
	不明なリスク国	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全月齢の回腸遠位部</li> <li>・30か月齢超の頭蓋、脳、眼、脊柱及び脊髄</li> </ul>	

## 国内のSRMの範囲

現行	全月齢の扁桃及び回腸遠位部並びに30か月齢超の頭部（舌、頬肉及び扁桃を除く。）、脊髄及び脊柱
諮問案 (2015年12月)	30か月齢超の頭部（舌、頬肉及び扁桃を除く。）及び脊髄

# 国内で定型BSEが発生する可能性に関する過去の評価

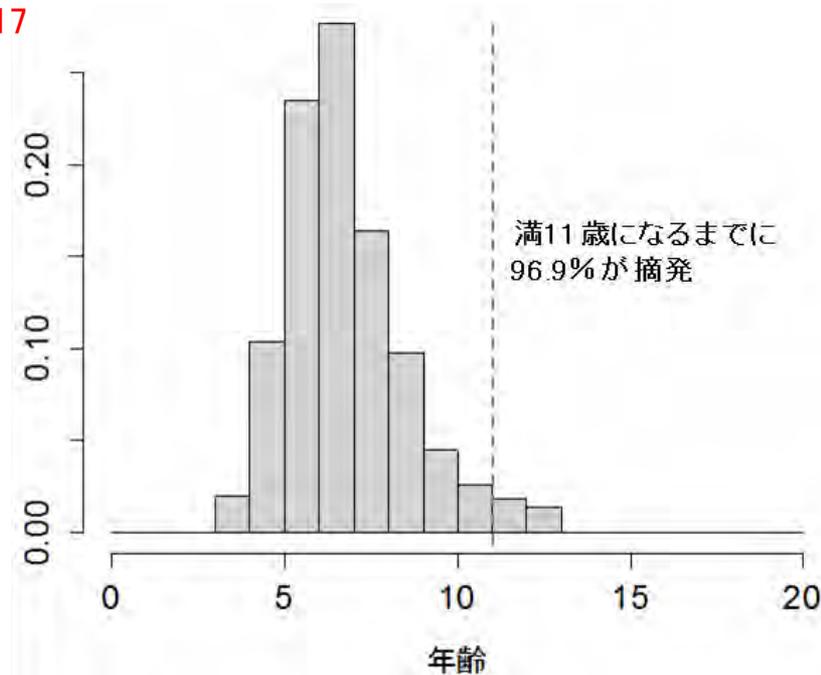
(プリオン評価書「牛海綿状脳症(BSE)対策の見直しに係る食品健康影響評価②」(2013年5月)より)

## 【飼料規制の有効性の確認に必要な検証期間(抜粋)評価書】P15~17

- ・2001年～2011年のEU17か国におけるBSE感染牛の摘発年齢分布より、出生から11年間が経過した牛群では感染牛のほとんどが摘発されていると考えられる。
- ・2001年～2004年のフランスにおけるBSE感染牛の推定潜伏期間及び感染時期より、出生から11年経過すればほとんどのBSE発生を確認できると考えられる。
- ・日本における月齢ごとのと畜頭数より、出生から10年間が経過すればほとんどの牛がと畜されると考えられる。



飼料規制の有効性の確認に必要な検証期間を11年と設定して、検証期間の起点は、BSE感染牛の出生年月でみた最終発生時点とするのが適切と考えられた。



EUにおけるBSE感染牛の推定摘発年齢分布 (評価書P15)

## 【評価結果(抜粋)】評価書P43~44

・総合的なBSE対策の実施により、出生年月でみた場合、2002年1月に生まれた牛を最後に、それ以降11年にわたり、BSEの発生は確認されていない。EUにおけるBSE発生の実績を踏まえると、BSE感染牛は満11歳になるまでにほとんど(約97%)が検出されると推定されることから、出生年月でみたBSEの最終発生から11年以上発生が確認されなければ、飼料規制等のBSE対策が継続されている中では、今後、BSEが発生する可能性はほとんどないものと考えられる。

# 国内で定型BSEが発生する可能性に関する過去の評価

(プリオン評価書

「牛海綿状脳症(BSE)対策の見直しに係る食品健康影響評価(健康と畜牛のBSE検査の廃止)」(2016年8月)より)

2016年5月末現在、出生年月で見た定型BSEの最終発生(2002年1月)以前に出生した牛は、172か月齢以上の高齢牛であり、現在飼養されている頭数は、月齢不明の牛を含めて21,033頭である。

これらの牛については、飼料規制強化前に出生しており、汚染飼料に曝露した可能性は否定できない。日本においても、飼料規制前に生まれた牛において、185か月齢でBSE陽性が確認された症例がある。また、EU諸国においても、172か月齢以上のBSE検査陽性牛が確認されている。

一方、2013年5月評価以降2016年5月末現在まで、64,126頭の2002年1月以前に生まれた牛(月齢不明を含む。)がと畜され又は死亡し、検査の対象とされたことになるが、これらにBSE検査陽性牛は確認されていない。

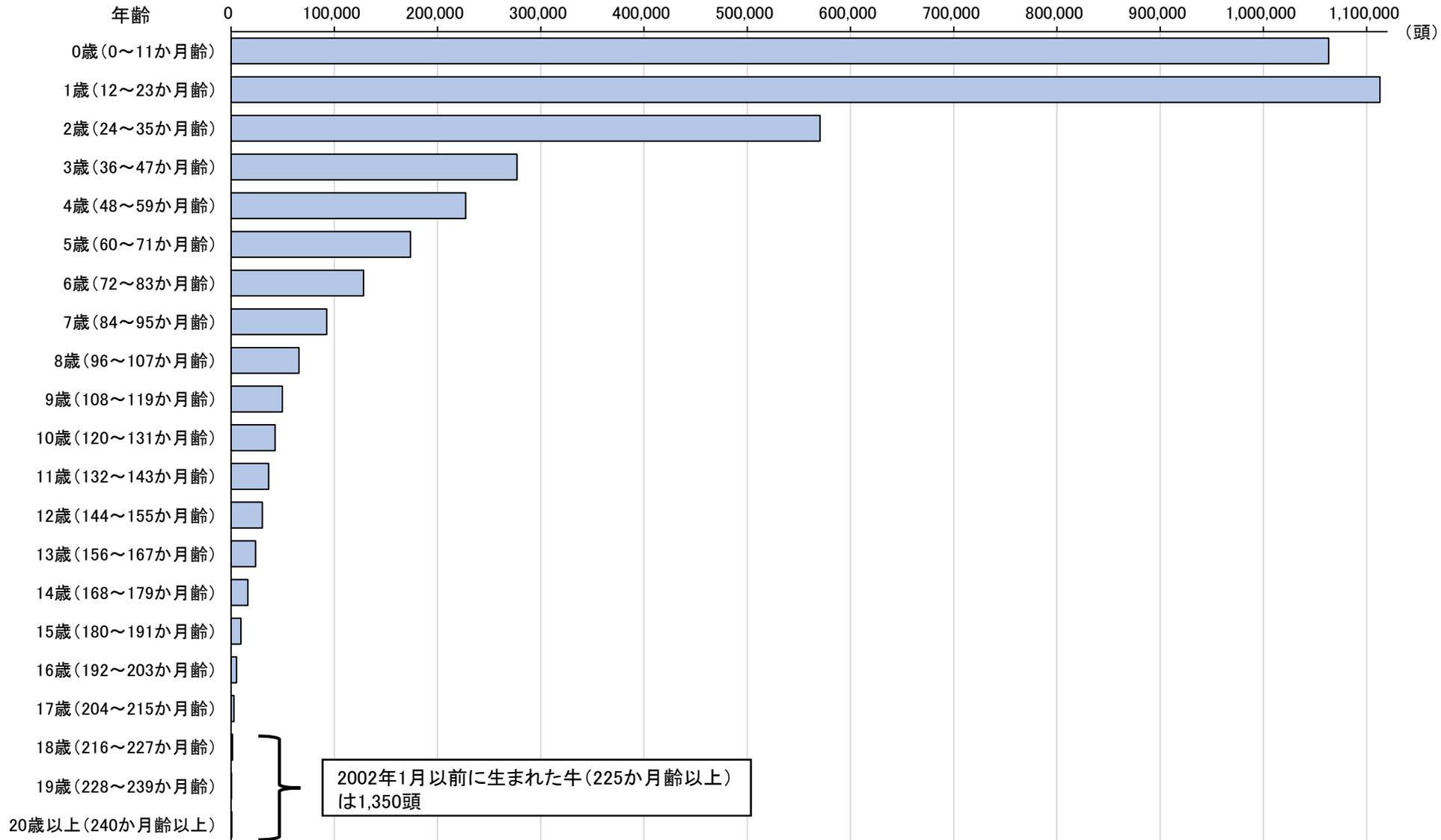
また、BSE検査の確認年月で見ると、2009年1月を最後に、現在までの7年間、BSE検査陽性牛は確認されていない。

これらの事実を踏まえると、2002年1月以前に出生した牛について、今後、定型BSEが発生する可能性は極めて低いものと考えられる。

# 日本の牛の年齢別飼養頭数(2020年10月現在)

飼養頭数

(独)家畜改良センターの公表情報を元に作成



2002年1月以前に生まれた牛(225か月齢以上)  
は1,350頭

その他に月齢不明牛\*が236頭存在する。  
\* 月齢不明牛とは生年月日が不明な牛を指す。